

Book Review



「歯科技工」別冊 機能的な補綴装置製作のための アトラス口腔顎顔面解剖

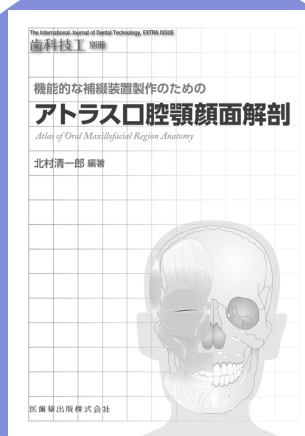
北村清一郎 編著



Reviewer

加藤武彦 Takehiko Kato
(神奈川県・加藤歯科医院)

A4判, 120頁
オールカラー
定価(本体5,800円+税)
医歯薬出版刊



本書の「序」で北村清一郎先生が「機能的な補綴装置の製作にあたっては歯科技工士も解剖学に関して歯科医師と知識を共有すべきである」と書かれています。

一方、超高齢社会において無歯顎患者に「噛めて・話せて・昔の自分の口元の再現ができる義歯」を製作するには、上下顎の顎堤だけに支持・維持を求める従来法の義歯製法では限界にきています。90歳の高齢者などは義歯装着から20年、30年と長期に渡るために、顎堤吸収は強くなり義歯の適合不良が生じます。このような顎堤吸収の強い患者さんに噛める義歯を作れる歯科医師が少なくなり、勢いIODなどインプラントに維持を求める症例を多く見かけます。そこで新しく登場してきた方法は、頬や舌・口唇など周囲組織をも義歯の維持の味方にする「デンチャースペース義歯」です。こうした、顎堤吸収に左右されない周囲組織の筋圧を味方にし、天然歯の元にあった歯槽骨を復元・再現して作るデンチャースペース義歯を製作すれば、顎堤吸収の強い症例にも満足の高い義歯ができます。

この義歯を製作するためには、顎堤吸収の度合いによって頬筋上方線維が義歯の維持・支持に役立つような床形態にしなければなりません。そのためには上顎結節の側方部バッカルスペースの厚さと深さ、吸収した骨量と一致させて作ります。そうすると反対側で咀嚼したときに頬筋が強力に働きます。また、同様に下顎の頬棚の床形態は吸収量を考慮に入れた厚みとなります。この二つが従来法の薄い基礎床では周囲組織が維持に働いてくれません。このように舌側からの筋圧と頬側からの筋圧を義歯の維持安定に利用します。

本書には、日ごろ石膏模型の上で補綴物を製作している歯科技工士のために、歯科技工士の松平 浩氏が「技工士の目から見た解剖」という観点でいろいろな模型や解剖図を出し、骨吸収が強くなると義歯床縁にオトガイ孔が触れてしまうことや、なぜ顎舌骨筋線をリリースしなければ疼痛の原因になるかなどを説明したシェーデルの図が示されておりす。

ここで本題に入ります。北村先生が上記のように言われている通り、義歯製作は歯科医師と歯科技工士が知識の

共有をしたうえでの共同作業です。そのためには印象を採る際、歯科医師が何のために上顎結節の外側を厚く採るか、下顎の舌側を深く採るかなどを歯科技工士に理解してもらわなければなりません。歯科医師が技工作業をすれば問題は解決するのですが、今は技工作業をする歯科医師が少なくなりその大半を歯科技工士に任せているのが現状です。しかし、前述したように各個人の吸収量にあわせた床形態を再現するためには、技工作業をする歯科技工士がその理論とテクニック、正常値と吸収量など解剖・機能を理解したうえで補綴物を製作してほしいと願っています。このような観点から本書はぜひとも欲しかった本でした。

今までは北村先生の前著である『臨床家のための口腔顎顔面解剖アトラス』を歯科技工士に示して理解を深めてもらっていましたが、この度、『歯科技工』別冊で歯科技工士のために書かれた、『アトラス口腔顎顔面解剖』が発行されました。この本をテキストとして歯科医師と歯科技工士双方が理解を深めることにより、患者満足度の高い義歯ができることを望みます。